大會抄錄

宋代における官僚家系について

森田憲司

宋代は科擧官僚の時代であるとされる。そして、科擧が受驗者の個人的資質に大きくかかわる故、それを通じて得られる地位は一代限りのものであり、官僚遂は層として流動的であったと指摘される。しかし一方では、六代、七代にも亙って官僚を出し續けた家系は、我々が宋代の史料を見ていく時、決して珍しいものではない。先に私は、こうした家系を、「官僚の家」と呼んだ。この「官僚の家」に於ては、「別塗出仕」とくに、様々な形で與えられる恩蔭による出仕が、その維持に大きな役割を果していた。しかも、確かに政權の中樞は、多くの場合、科擧官僚によって占められてはいたが、膨大な官僚組織での人的需要は、それだけではまかないきれず、その點を補ったのが、この「別塗出仕者」達であった。今回の發表では、こうした家系のいくつかを具體的に取り上げて檢討し、その官僚としての地位の維持（いわば、「恩蔭による官僚身分の再生産」）と、彼等の官僚組織内での位置とについて考えてみたい。

第一の材料としては、再び「成都氏族譜」を取り上げる。この書物が、一定地域の官僚層について、まとまった材料を與えてくれるからである。同じく「官僚の家」といっても、幾代かに亙って宰相を出したような中央の名門もあれば、「氏族譜」が對象としているような地方官僚群もある。當然の事ながら、その官界での地位は異なり、今回の對象である後者の場合、その多くは、幕職州縣官を振り出しに、蜀地の中下級地方官を轉々として、その官僚としての生涯を終えた人々である。彼等のような地方の中下層官僚の家系については、從來充分な檢討の對象となっていないので、その點を中心にして考えてみたい。

宋代の一都市圖について
—宋平江圖解讀作業—

伊原弘

宋平江圖は、南宋紹定二（一二二九）年の蘇州の都市圖として名高い。地方志等にも都市圖が揭載されているが、寫實性・精密さにおいて平江圖に一歩も二歩もゆずる。

本地圖は第一級の都市圖として、都市の發展・構造の究明に寄與するのみならず、交通・經濟、官衙・寺院の構造、さらには都市住民の研究にまで大きな意味を持つ。しかるに現在のところ、本地圖の利用法はおろか解讀法すら確立されておらず、充分な研究がなされていないのが實情である。

都市研究をこころみる時、この様に重要な意味を持つ都市圖を多角的に分析し、史料としての可能性を追求することが必要である。そしてそれは、單に平江圖の解說にとどまらず、都市史研究に大き